

地域の名産をもとに学びをつなぎ、豊かな心を育む学習づくりの創造

—地域を元気に、被災地を元気に—

兵庫県たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕

oyake_es@tatsuno.ed.jp

キーワード：循環型社会の構築、教科との関連、言語活動の充実、人とのかかわり

1. はじめに



写真1 新聞記事

左の新聞記事（平成24年3月9日付読売新聞社会面）に見える「ぼくらはつながってる」と書かれた見出し。これは、本校5年生が東日本大震災で被害の大きかった宮城県南三陸町のT小学校と仮設住宅に住まれるお年寄りを応援するために贈ったオリジナルソング「笑顔の花」に関する記事である。144名の子どもたちが、総合的な学習「たつの名産Sプロジェクト」を通して、「たつのを、そして南三陸町を元気にしよう」と学びをつなぎ、豊かな心を育んだ過程を紹介したい。

2. 学びをつなぐために

(1) 社会科の学習内容との関連

社会科では農業生産の工夫と課題について学習する。社会科で学んだ知識と、紫黒米の栽培体験を関連させることで、真の学びへとつなごうとした。

①バケツ稲との比較で気づきを高める

子どもたちは山根川農園で田植えを行った。初めて田植えをする子が多く、土の感触を味わうには効果的であった。さらに子どもたちの気づきを高めるために、デジタルカメラと紫黒米との生長を比較するためのバケツ稲を用意した。利用した品種はキヌヒカリで、籾（もみ）種は紫黒米と同じ日に植えたものである。

バケツ稲の条件

- 1株あたりの面積を変える。
- 1株あたりの肥料の量を変える。 等

子どもたちは、2種類の稲の生長を比較観察することで、単に「紫黒米を観察しよう」というより、条件よっての生長の違いを実感できた。稲刈りまでの約4ヶ月間調査した結果、子どもたちは、狭い間隔で植えると、肥料の取り合いになり、稲の背丈と色合いに差が出ることや、間隔を開けると肥料を得やすく、株分けをして大きくなることなどに気づいた。また比較観察での報告会では、デジタルカメラの記録をもとに説得力のある説明をすることができた。



写真2 比較観察

(2) 循環型農業を实践

水田の土づくりには、給食調理からでた生ゴミを堆肥に変えて活かした。いわゆる「循環型農業」である。環境問題を身近に感じ、循環型社会を構築する上でも、この循環型農業への取り組みは重要である。

また、これに関連して、河川敷の草や河川で取り除いた藻については、ゴミの日に出すのではなく、新聞に掲載された「植物ゴミの堆肥化」を参考に、土に変える取り組みも始め、約1ヶ月で約40袋分の植物ゴミを土へと変えた。



写真3 生ゴミの堆肥化

(3) 気づきを深める～遠隔地との交流～

①新聞記事をきっかけに～思考の広がり～

子どもたちは、10月末まで、「紫黒米はたつの名産＝「たつの」だけでつくっている」と信じて疑っていなかったため、読売新聞の記事を提示した。「小野市の小学生が古代米の稲刈り」と書いてある記事は、同じ紫黒米が県内の別の市で、しかもたつの市より前から栽培していたという内容だった。そこで初めて紫黒米が他地域でも栽培されていることを知る。子どもたちには、早速0小学校5年生に手紙を出し、収穫後の活動の様子をリサーチし、自らの今後の活動に活かそうとした。

新聞記事をきっかけに、既存の知識を覆すことに出会った時、子どもたちの探究心は、いっそう高まっていくことを実感した。

②ポリフェノールつながりをきっかけに

紫黒米に含まれるポリフェノールを調査するグループから、黒豆や紫芋にも同じ成分が含まれているという報告があった。そこで紫芋の名産地である鹿児島県K小と沖縄県K小とに依頼し、協働学習ソフト（コラボノート）を活用しながら情報交換を行った。その過程で、紫芋は中国から伝わってきたことや、紫芋を地域活性化に活かしていることを知った。



写真4 コラボノート

3. 地域を元気に

(1) 紫黒米を活かした製品づくり

①キャラクターづくりにはプロの技を！

紫黒米を地域の活性化につなげるために、子どもた

ちは、製品づくりをした。まず取り組んだのが紫黒米のキャラクターづくりである。お絵かきソフトで仕上げた作品をよりよいものにするために、たつの市出身のデザイナーのアドバイスをいただいた。子どもたちの目では完璧だと思う作品も、プロの目は違った。「動き」「食べなくなる色」などの指摘を受けた。アドバイスをもとにリニューアルした作品は生き生きした印象で、製作に携わった子どもたちは感激だった。



写真5 キャラクター

このキャラクターは校区で紫黒米のお粥を作るY社のパッケージなど3社の商品に採用され、子どもたちは大喜びだった。

紫黒米を利用した製品は、饅頭、飴、お粥、健康酢である。これらの製品は、市民祭りや駅で販売した。

②校区の高齢者を元気に！

PRと激励を兼ねて、紫黒米を使ったお粥を持って、校区にある老人ホームを訪問し、高齢者に食べていただいた。思いがけない子どもたちの訪問にうれしさがこみ上げる高齢者。「これを食べて長生きしてくださいね」の言葉がけに、涙を浮かべる方もいらっしやった。



写真6 老人ホーム訪問

4. 被災地を元気に

市の派遣による南三陸町の復興支援を終えた11月から、「大人の次は子どもたちの番」を合い言葉に始まった復興支援活動。話し合いの結果、南三陸町のT小学校と仮設住宅のお年寄りに、紫黒米製品の売り上げによる物資、紫黒米製品、そしてDVDによる応援メッセージを贈ることにした。

①被災者の心に寄り添うために

南三陸町を応援するための歌づくりについては11月中旬から国語の学習と関連させながら開始した。この活動には、被災体験のない子どもたちがどれだけ被災者の心に寄り添えるかが重要である。そこで3名のゲストティーチャー（消防隊員1名、ボランティア2名）からお話を聞いたり、新聞記事から様子を調べたり、阪神淡路大震災の作文を利用したりした。



写真7 南三陸の被害を知る

②歌詞づくり～歌手Kさんの存在～

学習は次のように進んだ。

- ・歌詞に入りたい言葉書き出し、全体で整理する。
- ・実際に歌われている応援ソングを分析する。

・グループごとに歌詞を考え、全体で1つに合わせる。

グループでの歌詞づくりで迷った子どもたちを勇気づけたのは、震災復興イベントで活躍する歌手Kさんの言葉だった。アドバイスをいただくきっかけは、宮城県で被災されたKさんの新聞記事だった。Kさんへの手紙がきっかけで、Kさんからのアドバイスにつながったのである。「きれいな言葉を並べるのではなく、素直な思いを伝えることが大切」のアドバイスに再度やる気になった子どもたち。完成した作品を伝えたところ、Kさんのほめ言葉にいつそう自信を深めていた。

子どもたちは、歌詞を完成させたあと、音楽の時間を活用して作曲活動を行った。グループごとに、ピアノ、リコーダー、コンピュータソフト等を用いて考え、全体で1つの曲にまとめた。完成品を再度、Kさんに送り、アドバイスをいただいた。

歌と応援メッセージをDVD編集し、3月11日に合わせて、南三陸町へ届けたところ、約1週間後にお礼の手紙や写真が届いた。そこに写る子どもたちが送った品。それを見て大変満足そうな表情を見せていた。

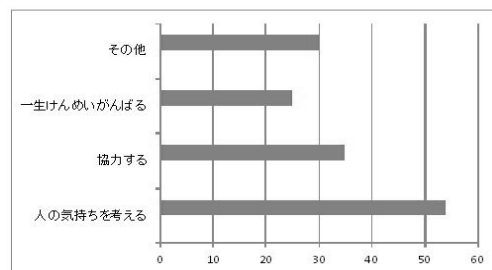
笑顔の花

テレビにうつる景色
信じられなかった
あの日の涙
失った大切なもの
今でも忘れられない記憶
でも明日は必ず来るから
でもぼくらが応援するから
夢と希望でいっぱいになる
そんな日にむかって
1歩1歩 歩もうよ

見上げてごらん
この大きな空
ぼくらは
この大きな空のもと
つながっている
どんな時でも
どんな場所でもつながっている

だから元氣を出して
そして咲かせようよ
笑顔満開の花を
100年たっても
かがやき続ける花を

5. 子どもたちに身についた力



上のグラフは、学習を終えた子どもたちに大切だと思ったことを書かせた結果である。上位から「人の気持ちを考える」、「協力する」、「一生懸命がんばる」の順であった。友だちと協力しながら活動したことや、地域や企業、そしてT小学校など、多くの人とのかわりがこのような結果につながったのだと思う。

6. 終わりに

1年間、学びをつなげる子どもたちの目は輝いていた。子どもたちは、紫黒米をきっかけに、地域へのPRだけでなく南三陸町を元気にしたいと思えるようになった。その過程には、子どもたちのやる気に地域や専門家が応え、その思いに子どもが応えながら学びが繋がったからだと思う。仲間とともに学びをつなげる活動こそが、子どもたちの豊かな心を育むことを実感し、活動を支えてくださった皆様に感謝したい。南三陸町T小との交流は、現在、文通交流として続いている。これが太い絆に変わることを期待して。